広報誌

Idemitsu

| Special Feature |

いろんなa!を、このまちに。

地域と共に進化する apollostation

vol.9 2024

3

3

10

CONTENTS

3 中計特集 idemitsu VISION
いろんなa!を、このまちに。
地域と共に進化する apollostation

10 Special Feature
題名のない音楽会
これまでも、これからも、音楽と共に
[記念対談]
代表取締役社長 木藤 俊一 × プロデューサー／演出 鬼久保 美帆さん

16 HIGHLIGHT TOPICS

20 「題名のない音楽会」が60周年

MAGAZINE CONCEPT

広報誌Idemitsuのコンセプト

2030年ビジョン「責任ある変革者」の実現に向かう、
出光グループの"今"をお届けする広報誌。
毎号の特集で、当社グループにおける注目の話題をピックアップし、
さまざまな切り口でご紹介。

いろんな a! を、このまちに。

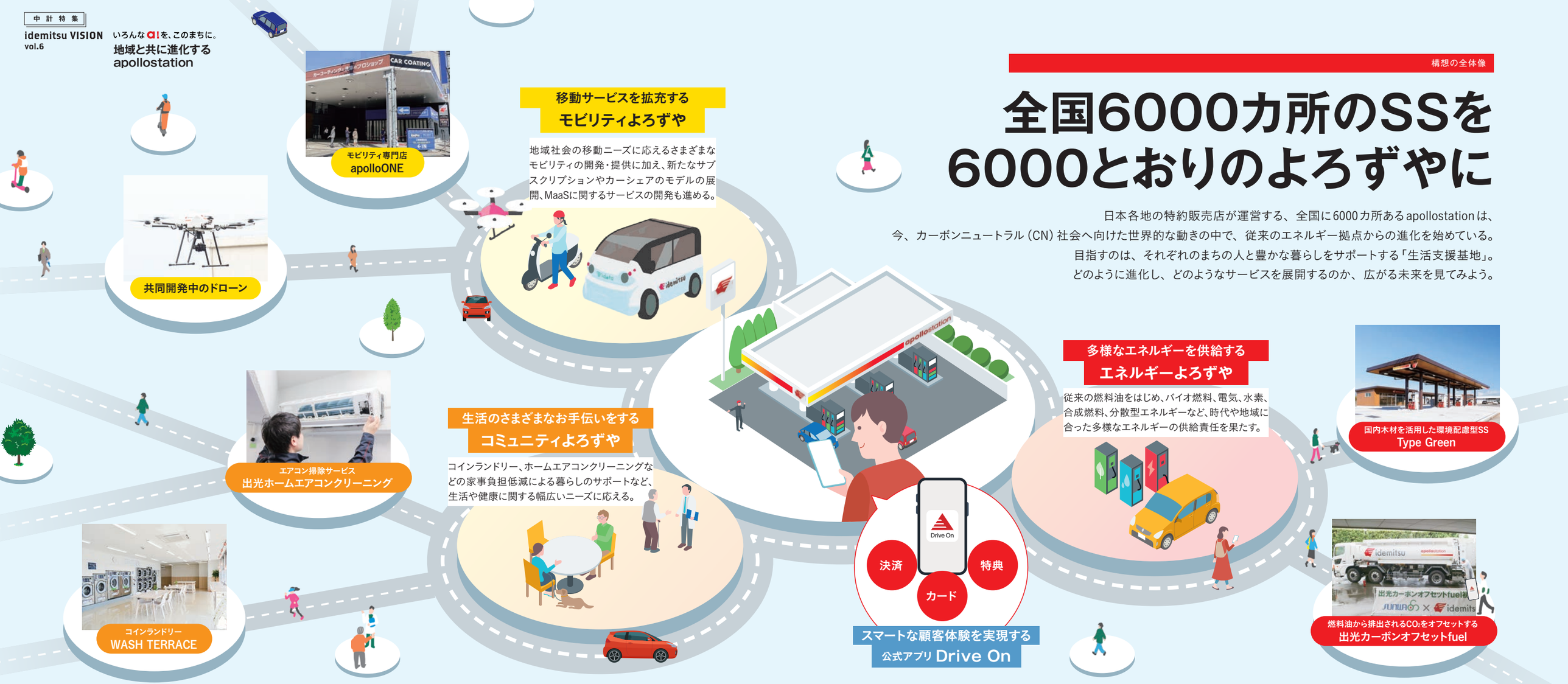
地域と共に進化する
apollostation

出光興産のサービスステーション（SS）「apollostation」が全国各地で新しいカタチに進化している。多様なエネルギーの供給、幅広い移動手段の提供、暮らしを豊かにするコミュニティづくりなどの展開によって、地域のニーズに応え、スローガン「いろんな a! を、このまちに。」に込めた驚きや安心といった価値を提供する拠点へ。地域の特約販売店とつくる、「スマートよろずや構想」の今をご紹介する。

構想の全体像

全国6000カ所のSSを6000とおりのよろずやに

日本各地の特約販売店が運営する、全国に6000カ所あるapollostationは、今、カーボンニュートラル（CN）社会へ向けた世界的な動きの中で、従来のエネルギー拠点からの進化を始めている。目指すのは、それぞれのまちの人と豊かな暮らしをサポートする「生活支援基地」。どのように進化し、どのようなサービスを展開するのか、広がる未来を見てみよう。



地域社会に根差したSSを「いろんなa!を、このまちに。」の価値を提供する拠点に

昨今、燃料油の需要減少や、地域の過疎化・高齢化による事業継承の課題に伴い、SSの数は減少している。SSは、地域の人々にとって利便性の高い場所にあり、地域とつながりの深い特約販売店が運営する、地域社会のコミュニティを支える重要なインフラだ。この拠点を維持し、地域社会の課題を解決するさまざまなサービスや、移動やエネルギーの変革を支えるソリューションなどの展開を通じて、スローガン「いろんなa!を、このまちに。」に込めた「a!（あ!）」という驚きや安心をお客様の暮らしに幅広く提供する場所へとよろず（無限・多様）に進化させていく。それが、「スマートよろずや構想」の全貌だ。

SSの進化の軸は3つ。時代や地域に合った多様なエネルギーを供給する「エネルギーよろずや」。EVやドローンなどの移動サービスを拡充する「モビリティよろずや」。その他の幅広いサービスで暮らしを支える「コミュニティよろずや」。全国のSSが、地域のニーズに合わせて3分野の機能を掛け合わせ、独自の店づくりを行っていく。また、これらのサービスとお客様とをつなぐのが、800万ダウンロード数を超えた専用アプリ「DriveOn」を基点とするロイヤリティ戦略だ。決済サービスや予約機能と連動した便利で〝スマート〟なデジタルサービスに加えて、今後はSSの利用が楽しく・おトクになるプログラムの拡充などで、ブランドに愛着を持っていただき、apollostationを選んで足を運んでいただくことを目指す。

すでに、2023年10月に、給油以外のモビリティサービスに特化したSS「apolloONE（アポロワン）」第1号店が都内に誕生し、順調に店舗数を増やしている。また、特約販売店や自治体、企業との実証実験を重ねてサービスメニューを増やしている他、特約販売店のビジョン経営を推進する「出光経営カレッジ」、人材採用・定着を支援するプログラムなど、さまざまなサポートを通して伴走する体制を整えた。6000とおりのよろずやが人々の「生活支援基地」となり地域社会を支える未来へ向け、社会実装を進めていく。

INTERVIEW

INTERVIEW いつの時代も変わらないSSの使命を未来につなぐ

上席執行役員
販売管掌（兼）販売部長
小久保（こくぼ） 欣正（よしまさ）

1988年出光興産入社。支店に配属され特約販売店を担当する。以来、販売部や出光リテール販売株式会社九州カンパニー社長、販売部リテール担当部長、出光リテール販売代表取締役社長等の要職を歴任し、出光興産のリテール販売戦略の第一線を担ってきた。2021年に販売部長に着任し、2023年7月より上席執行役員、2024年6月より現職。

CN社会の実現に向けた世界的な動きの中、国内のSSの数も減少傾向にある。しかし、本質に立ち返ると、燃料油の供給だけではなく、時代の変化に対応し進化しながら、地域社会の生活を支えるさまざまなサービスを提供し続けてきたSSの存在意義が見えてきた。これからのSSの役割とは何か、どのように進化していくべきなのか。小久保上席執行役員に聞いた。

地域の「生活支援基地」であるSSの重要性

戦後、モータリゼーションの幕開けとともに土埃（ぼこり）が舞う道に車が走り出し、燃料油を手回しで給油できる計量機を設置したのがSSの始まりでした。モータリゼーションが進むにつれ、計量機の数が増え、コンクリートの床面になり、外置きの燃料タンクは地下へ。さらに、ピット（リフト室）を備え、軽整備やオイル交換、タイヤ交換、洗車まで行うようになるなど、SSは時代の変化に合わせて進化し続けてきました。これまでの進化は、全国どのSSでも変わらない画一的な販売施策の進化だったといえます。しかし、これからは、地域ごとに異なるより有機的な進化が必要です。

その背景には、多様なエネルギーに対する世の中の考え方の変化があります。世界の喫緊の課題として脱炭素を急激に進める考え方から、資源価格の高騰などもあって、昨今ではCN社会の実現に向けた、より現実的なエネルギートランジションが求められるようになりました。ガソリン需要の減少は、かつての想定と比較すると緩やかになることが予想される他、EVだけでなく、エンジン車やPHV、水素エンジン車など、あらゆる手段を使ってCNを達成する"マルチパスウェイ"の考え方も広がっています。こうした市場環境の中で、SSに求められる役割はむしろ大きくなっていると考えています。

SSは、燃料油供給だけではなく、コーティングやオイル交換をはじめとするさまざまなカーケアサービスを通して地域の人々の生活を支えてきた拠点です。ガソリン需要の減少によって、SSが減ってしまったら、燃料油の安定供給が困難になるだけでなく、それ以外のさまざまなサービスや、お客様と事業者のつながりもなくなってしまうのです。しかし、この拠点を未来に残すことができれば、20年、30年後の社会には、新しいエネルギーの供給や、モビリティ、そして暮らしを支えるコミュニティの拠点として、地域を支える存在であり続けることができるでしょう。SSを「地域の生活支援基地」に進化させていくことで、地域を支えてきた拠点を残す。これが、「スマートよろずや構想」で実現したい未来です。

現場で変革に伴走する「徹底力」が出光の強み

「スマートよろずや構想」を実現していくにあたり、出光の大きな強みは「徹底力」です。創業時の当社は、特約販売店のひとつでした。戦後、石油元売り各社の間を縫うようにして、その土地の名士の方々を訪ね、これからの未来に必要な移動を支えるエネルギー拠点「SS」についてビジョンを共にし、全国にネットワークを広げてきました。この歴史的な背景から、当社のSSビジネスには、「流通経路の短さ」という特徴があります。多段階の流通経路を取らずにSSを運営する特約販売店様が多いため、当社の社員は常に特約販売店様と共に、SSの現場に立って仕事をしてきました。この地域にはどんなニーズがあるか、それに対してSSでどのようなサービスができるか、特約販売店様と一緒に考えつくってきました。この姿勢は、「スマートよろずや構想」でも変わりません。一方で、これまでのような画一的な進化から振り切って、地域の需要にもう一歩踏み込んだサービスを提供できるSSづくりへの進化が必要です。そのために、石油元売りとしては非効率と思われるほど数多くの販売施策を用意し、地域のお客様に必要な施策を選んでいただけるようにしています。急激な業態転換ではなく、できる施策をひとつずつ組み合わせ、つなげていくことで、振り返ったときに、全く異なる進化したSSが完成しているはずです。

特約販売店様と共にSSの商売で地域を支える

今後も、ひとつでも多くのSSを「スマートよろずや」へと進化させ、「事実」を積み上げることにこだわっていきます。あえて「成果」ではなく「事実」としているのは、一時的な利益など数字を目標にすることで、「地域に必要なサービスを選び、つなげていく」という本来の目的を見誤らないためです。地域のお客様のニーズに応えるサービスを提供したという「事実」が積み上がれば、必ず成果も付いてくると考えています。実際に、「スマートよろずや構想」に共感してくださる特約販売店様は非常に増えてきています。車やお客様への深い愛情を持ち、燃料油がなくなっても、商売を通して地域のお客様に貢献したいという特約販売店の方々の想いが、これからも地域社会を支えていくに違いありません。全国6000カ所のSSが、6000とおりのスマートよろずやとなり、apollostationが地域のお客様にとって不可欠な存在になれるよう、これからも特約販売店様と共に変革をカタチにしていきます。

テレビCM「TSUMUGU篇」のワンシーン

地域社会を支える新しいSSのカタチ

地域社会への貢献の想いをカタチにし、
「よろずや」へと進化するSSが徐々に増えている。

コーポレートサイトで、全国のスマートよろずやの事例をご紹介しています。

1

case ｜ 千葉県 ヤブサキ産業株式会社 ｜

“カーライフ”から“ライフ”を支えるSSへ

千葉県市川市で第1号店を起こしたヤブサキ産業は、現在千葉県トップクラスの売り上げを誇る石油販売会社のひとつ。同社は、「スマートよろずや構想」以前から、保有するSSや整備工場など合計25カ所の拠点を活用し、トータルカーライフサポートをワンストップで提供する構想を描いていた。給油、修繕、車検など、自動車のユーザーは、日々さまざまな周辺サービスを利用しているが、一つひとつを異なる事業者に依頼しなくてはならないことに不便さを感じるお客様も多い。同社の考えるワンストップのサービス提供は、そんなユーザーのニーズに応える非常に画期的なものだ。

2023年7月、その構想を実現する大型複合店舗となる「ユーカリが丘SS」がオープン。約1500坪もの広大な敷地に、車買取販売専門店やセルフ洗車場、EV充電器、EVカーシェア、コーティング専門店、コインランドリー、カフェエリア……さまざまな店舗が併設された。自動車ユーザーのあらゆるニーズに応えつつ、今後のEV需要を見据えた設備も完備。緊急時発電機の設置で、地域の防災拠点としての役割も担う。

さらに、数年前にはSSを利用するお客様向けのライフサポート事業も立ち上げている。同社の薮嵜社長は、「介護領域の事業者とも連携し、地域住民向けの介護サポートを提供しています。今後、私たちが不動産事業者や司法書士、行政書士の窓口の機能を担うことで、”カーライフ“から”ライフ“を支える本当のよろずやになれるのではないでしょうか」と、ますます広がる構想の展望を語った。

2

case ｜ 岡山県 田中実業株式会社 ｜

畜産業への進出で地域のブランド牛を守る

田中実業株式会社は、岡山県新見市を拠点に90年以上事業を続ける老舗。1956年に、出光興産の販売店になる。同社は、2016年に地元新見市のブランド牛である「千屋牛」を守るため、農業・畜産業を担う子会社を設立し、まったく経験のなかった畜産業に参入した。農業・畜産業は、事業の担い手の高齢化、後継者不足が原因で、全国で廃業が進む。千屋牛の生産頭数も、近年激減してしまっていた。

同社は、経営するSSを、生産した千屋牛の販売拠点として活用している。セルフ津山インターSSには、冷凍自動販売機が設置され、新鮮な肉を購入することができる。また、千屋牛を使った牛カツバーガーやライスバーガー、ホットドッグが食べられる小規模店舗もあり、給油後にそのままランチをしたり、夕食用の肉を買って帰ったりする地元のお客様が集う。ブランド牛の生産・販売を通じて地域の資産を後世につなぐだけでなく、SSがコミュニティ活性化の役割を担っている。

「農家やバス・タクシーの運転手、新聞配達などあらゆるところで人材不足・高齢化が問題になっています。そういった地域の不便な部分や合理化・効率化できそうな領域を『スマートよろずや』に組み込んでいきたい」と、同社の田中社長。「一方で、すでに新しいことに取り組む余力がないという特約販売店があるのも現実。出光興産が、スピード感を持って『スマートよろずや構想』を進めていってくれることを期待しています」と語る。

3

case ｜ 三重県 青山商事株式会社 ｜

SSでプラモデル屋!? 地域のコミュニティ形成を支援

四日市市内の国道沿いにあるプリテール野田SS。そこには24時間営業のプラモデルショップがある。店長の脇谷さんは、かつてプラモデルショップを経営していた。SSは消防法により、深夜の無人営業が禁止されている。深夜帯のリソースを活用したいという考えから生まれたのが、SSのサービスルームをプラモデルショップに改装するというアイデアだった。プラモデルの愛好家は、日中の仕事と並行し、夜中に作業をするケースが多く、ひとつでも部品が欠けると組み立てが進まないことから、深夜営業に大きな需要がある。脇谷さんはその需要に目をつけた。

さらにチャレンジングな試みも行っている。それは、プラモデルイベントの開催を通して、地域のコミュニティ形成をねらう取り組みだ。「定期的にプロの先生をお招きし、プラモデル制作の技術を高める教室を開いています。また、自作のプラモデルを競い合うフォトコンテストも人気です。イベントを通じて、お客様同士がつながり、交流を深めるケースは多いです。中には、学校生活にうまくなじめない子どもたちが、友人をつくっていることもあります。共通の趣味を持つ人同士が出会える居場所がひとつあることで、新しい地域のコミュニティの形成につながる。こういった役割を担えることは、私たちにとってもやりがいになっています」と脇谷さん。プリテール野田SSは、地域の人たちが出会い交流する、新しいカタチのSSの先駆けとなっている。

出光が一社提供で支え続けている
テレビ番組「題名のない音楽会」が、
2024年8月に60周年を迎えます。
1964年より良質な音楽を皆さまに届け続けてきた
これまでを振り返りながら、
当時から変わらない番組のコンセプトや、
長年提供を続けている
当社の想いをご紹介します。

指揮者
アンドレア・
バッティストーニ

60th

題名のない音楽会

これまでも、これからも、音楽と共に

世界一長寿の音楽番組 クラシック音楽の普及に貢献

「題名のない音楽会」は、「良質な音楽をお茶の間に届ける」をコンセプトに、番組を通じて音楽と視聴者との距離を縮め、日本の音楽文化の向上に貢献することを目的に放送してきました。番組開始以降、当社の一社提供を続けており、2017年3月には放送2500回を迎え、『世界一長寿のクラシック音楽番組』としてギネス世界記録™にも登録されています。2017年4月より、クラシック音楽に造詣の深い俳優・歌手の石丸幹二氏が6代目司会者に就任。音楽の道先案内役「劇場支配人」を務めています。

これまで、世界で活躍する日本人アーティストをいち早く紹介してきた他、1990年には番組開始25周年を記念して出光音楽賞を制定し、将来有望な若手や新進音楽家を表彰するなど、クラシック界のニュースター輩出に貢献してきました。

「題名のない音楽会」誕生に深く関わり、初代司会者を務めた作曲家・黛敏郎（まゆずみとしろう）氏（1929～97年）は、「多くの人びとにとって、音楽とは日常生活とかなり縁の遠い存在」と考えていました。テレビ番組で音楽を扱う以上、「一見音楽とかかわりのない人たちこそ対象にしなければならない」と、次のようなキャッチフレーズを掲げ、番組をスタートしたのです。

「あなたは音楽が嫌いですか？　退屈ですか？　難しいですか？　音楽なんかなくたって人生は成立すると考えますか？

もしあなたがそう思っているなら、あなたはこの番組を見る資格があります。私たちの番組はそうした人たちにささげる番組です」

このような番組の姿勢は60年間変わることなく、視聴者の皆さまと音楽との出会いの場として、オーケストラと異ジャンルの音楽を融合したり、多彩なジャンルの音楽家をゲストに招いたりするなど、現在までさまざまな挑戦を続けています。2024年度は、60周年を記念した特別企画を放送中。「ボーダーレス」をテーマに、「題名のない音楽会」でしか見られない斬新な企画やコラボレーションで、新たな視点から音楽の魅力を伝えています。

Column

6代目司会者
石丸 幹二さん

1964年生まれの「題名のない音楽会」と1965年生まれの私は、同世代の仲間といってもいいでしょうか。実際、幼い頃、私の脳内へ音楽のあれこれを植え付けてくれたのは、黛敏郎さん率いる「題名のない音楽会」でした。中高時代、番組で触れる演奏は、吹奏楽部やオーケストラ部にのめり込んでいた私の胸を高鳴らせ、音大に入学してからは目標となったものです。劇団四季を経てフリーになり、「題名のない音楽会」へのゲスト出演が叶うようになったときは嬉しかった。とはいえ、俳優活動が中心の私には、番組は遠くに輝く光のような存在でした。そんな私に、司会者にとの声掛けがあったときの驚きたるや。まさしく青天の霹靂（へきれき）。嬉しさのあまり即答でお引き受けしましたが、あまりの大役に不安と心配がどっと押し寄せてきました。クラシック音楽が好き、という気持ちだけでは司会は務まらない。けれども、私の怖れを払拭してくれたのは、番組に関わる全ての人たちの、音楽を愛する心でした。「題名のない音楽会」は、国内外の一流の音楽家の演奏を間近に聴ける場であり、私の役割は、彼らと視聴者の橋渡しだと思っています。多彩な音楽を楽しんでもらいたい。初めは緊張していた若き演奏家が、出演を重ねるにつれ自信と技量を身に付けていくさまを応援してほしい。さらには、どんどん世界に羽ばたいていく頼もしい姿を一緒に喜び、見届けてほしい。この60年、「題名のない音楽会」は、日本社会の喜怒哀楽を目撃してきました。近年は、震災やコロナ禍など悲しみや苦しみが多く、その中にあって、ブレることなく一流の音楽を届けてきました。出光興産様、そして番組をつくり続けてこられた諸先輩方に深い敬意を表するとともに、小さな存在ながら、今、一員であることに誇りを持っています。

SPECIAL TALK

「題名のない音楽会」
60周年記念対談

60周年の節目を記念して、当番組のプロデューサーである鬼久保美帆さんと木藤社長が、番組づくりに懸ける想いや、出光興産が長年一社提供を続ける理由などについて、語り合いました。

音楽の楽しさを一人でも多くの人に。社会に貢献する企業として番組を支え続ける。

代表取締役社長
木藤 俊一

×

「題名のない音楽会」プロデューサー／演出
鬼久保 美帆さん

1995年に東京藝術大学を卒業しテレビ朝日に入社。内勤部門に勤務した後、制作部門に異動し2000年より当番組を担当。2006年からプロデューサーを務める。ピティナ・ピアノコンペティションや藝大ピアノコンクールなどの審査委員も務める。

60年続く番組はテレビ界の奇跡

——まずは、60周年を迎えた現在の率直なお気持ちをお聞かせください。

木藤　「題名のない音楽会」がスタートしたのは1964年8月、東京オリンピックの年でした。創業者である出光佐三店主は、血のにじむような努力で事業を興し、それを大きくしながらも、一貫して「社会に貢献する企業になりたい」と強く願っていました。実際、第二の定款として「出光は今は社会に必要な石油業をやっているが、出光の究極の目的は人間が真に働く姿を現して、国家社会に貢献することである」と明言していました。その原点に立ち返り、よわい80を数えようとする頃から、この「題名のない音楽会」や出光美術館など、さまざまな文化事業を始めたのです。それから、なんと60年。テレビ朝日さんをはじめ関係者の絶大なご支援をいただきながら現在まで継続できたことを、改めて誇りに思います。

鬼久保　60周年を迎える番組は、テレビ界では奇跡のような存在です。やはりそれは、スポンサー様がいてくださってこそ。改めて感謝申し上げます。「題名のない音楽会」は、テレビの黎明期に始まった番組で、これはもはやひとつの音楽番組というだけでなく、テレビ史に残る偉業だと思います。

——過去の放送を振り返り、お二人にとって印象深い思い出は何でしょうか。

木藤　2011年の東日本大震災の後に実施した「復興応援コンサート」です。震災から約1カ月後に開催し、2回に分けて放送されました。非常に印象に残っていますね。

鬼久保　まさに、私が一番記憶に残っているのも、「復興応援コンサート」です。2011年4月12日にサントリーホールで開催・収録したこのコンサートは本来、出光創業100周年記念として開催される予定でした。山田耕筰が初めて書いた交響曲を演奏しよう、出光音楽賞の受賞者をソリストに迎え、同じ100周年を迎える東京フィルハーモニー交響楽団に演奏をお願いしよう、などなど、約2年をかけてさまざまな準備をしていたのです。しかし、3月11日に東日本大震災が起こり、以降、街からもテレビからも、音楽が消えました。そんな中、私たちは震災からわずか1カ月後に収録を行いました。「こんな大変な目に遭っているときに、音楽とは何事だ」などのお声もあり、実施の是非が議論されましたが、出光さんは「音楽は悪ではない」と、コンサートの開催を後押ししてくださいました。過酷な状況の中、この番組の音楽を通した社会への貢献を、出光さんは心底信じて支え続けてくださっている。その想いを念頭に毎回の企画を考えていかなければと、思いを新たにした出来事でした。

作り手・聞き手双方が「楽しめる」高品質の音楽を届ける

——時代に合わせた企画を展開していますが、時代が変わっても変わらない番組づくりのこだわりは何でしょうか。

鬼久保　一番は音楽を「楽しむ」ことです。視聴者はもちろんですが、出演者が楽しまなければ、それは伝わりません。双方が楽しめて、かつ視聴者が見やすい入り口がある企画をと、つくり手として常に考えています。そして、高いクオリティの音楽をお送りするという本筋は、いつの時代にも変わりません。

木藤　クラシック音楽をわかりやなシる年り部内を1

すくお届けし、多くの方々に親しんでいただきたいというのが、番組当初からの変わらぬコンセプトだと思っています。ですから、誰もが知っている名曲をオーケストラバージョンで演奏したり、いろいろな分野のアーティストにご出演いただいたりと、さまざまなユニークな企画を行っています。クラシックが苦手な方にも、「オーケストラっていいな」「クラシックっていいな」と思ってもらえるような番組にしていただくことをお願いしてきました。そのコンセプトにふさわしい企画を立て、世界中を駆けずり回ってアーティストを探してくださる鬼久保さんの情熱によって番組は成り立っていると、私は確信しています。

鬼久保　ありがとうございます。番組の初代司会者である黛敏郎さんは、「あなたは音楽が嫌いですか？そういう方に捧げる番組です」と、番組コンセプトを表現しました。内輪で楽しむのではなく、音楽の楽しみを一人でも多くの方に伝えたいというのが、変わらぬコンセプトとして貫かれています。

——ところで、木藤社長は音楽のご経験はありますか？

木藤　あまり公言していないのですが、幼稚園の頃からバイオリンを習っていました。小学校に入ってからは外で遊ぶ方が楽しくなり、極めるところまではいきませんでした。高校時代は軽音楽部に入って、レッド・ツェッペリンやグランド・ファンク・レイルロードなどを演奏していましたね。私はギターとベースとドラムをやっていました。

鬼久保　弦楽器も打楽器もできちゃうなんて！万能ですね。

木藤　自分の部屋にドラムを置いて、叩いてストレス解消していました。両親からは、「ドラムを叩くドラ息子」なんて言われていましたが（笑）。作詞・作曲もして、修学旅行ではギターを持参し、バスガイドさんを前に自作の曲を披露しました。

鬼久保　いつか番組の番外編で演奏をお願いします（笑）。

木藤　つい白状してしまいました（笑）。

「楽しむ」を通じた社会貢献根底にある想いを共に

——出光興産が、長く番組を支援し続けるのはなぜでしょうか。

木藤　まずは「社会に貢献する企業でありたい」からです。そして鬼久保さんのお話にもありましたが、音楽は楽しむものですよね。仕事も同じで、創業者は「仕事を楽しむ」あるいは、「仕事を芸術化する」という言葉をよく使っていました。音楽も仕事も、その過程には苦しいことや大変なことは山ほどあります。ただそれを乗り越えて、達成感を味わい、楽しいと思えたら、こんなにすてきなことはない。「楽しむ」という番組と共通する考え方が、出光興産の企業文化の中に根強くあったことが、支援を継続してこられた最大の理由ではないかと思っています。

鬼久保　初代司会者の黛さんは、出光さんのことを「金は出すが口は出さない」と、黛さんらしい言葉で感謝を表現されていました。実際、出光さんから番組の内容に対して何か意見をされるということは一度もありませんが、出光さんが社会にどう貢献したいかなどの大きな方向性については常にお話を伺っています。例えば、コロナ禍で再び音楽が危機を迎えたときに、番組は少人数による「ブリーズバンド」という新しい合奏スタイルを生み出し、皆さまに演奏を楽しんでいただこうと楽譜も無料で配布しました。それも、出光さんが社会にどう貢献しているかを常日頃担当者の方々から伺っていたので、危機のときにこそ力を発揮したいと思い実現したことでした。大きな方向性を共有しながら、番組を支えていただいていると思っています。

ヤングスターの発掘に注力音楽から始まる社会貢献を次世代につなぐ

——番組が長く続く秘訣と、今後の展開についてお聞かせください。

鬼久保　若い音楽家をどんどん取り上げ、バトンタッチをしていくことだと思います。どの分野でもヤングスターが出てくれば、業界は活気づきます。特に2015年以降は若手の発掘に注力しており、次の時代の旗手となる新しい音楽家を絶え間なく見つけ、彼らがまた次につなげていくというサイクルをつくっていきたいと思っています。私もおかげさまで24年間番組を担当させていただく中で、反田恭平さんのような音楽家との出会いがありました。彼は12歳のときに番組のオーディションで発掘し、18歳で国内のピアノコンクールで優勝、2021年には世界コンクールで2位を取るピアニストに成長しました。世界の第一線で活躍する音楽家の成長を、その起点から現在進行形で見る機会に恵まれることは、本当に大きな喜びです。

木藤　「出光音楽賞」も今年で34回目を迎え、「若手の登竜門」といわれるようになりました。受賞者の皆さまに心から喜んでいただくことができ、これを励みに世界で活躍していただけるとともに、年々受賞者のレベルが上がっているのを感じ、とても嬉しく思っています。

若い才能の発掘で社会に貢献する

鬼久保　出光音楽賞を受賞できるような才能をもっと早い段階から発掘することが、今の私の目標です。そして、彼らが成長し、自身の活躍を通して才能を社会に還元していく活動までサポートしていきたいと思います。現在もその一環として、60周年記念の企画のひとつで、出光音楽賞の受賞者で、今やベルリンを拠点に活躍する世界的指揮者になった山田和樹さんの指導の下、18歳以下の一般の方を集めたオーケストラをつくろうとしています。山田さんは「オーケストラは社会の縮図」というお考えをお持ちで、この企画を通じて音楽の道を志してもらうだけでなく、社会における役割も学んでもらえたら嬉しいというお話をいただきました。そういった、音楽と社会を結ぶ深い知見をお持ちの方々と一緒に新しい企画を生み出していけることも、非常に幸せなことだと感じています。

——最後に、番組をまだ見たことがない方も含め、皆さまにメッセージをお願いします。

鬼久保　「題名のない音楽会」は、その時々に話題となっているトピックスを反映した音楽番組です。ご出演いただく方は、世界で活躍されている音楽家ばかりですので、この番組を続けて視聴していただきますと、耳が育っていくかと思います。ぜひ、土曜日の朝の気楽なティータイムのお供として、ご覧いただけると幸いです。

——木藤社長からも、メッセージをお願いします。

木藤　「題名のない音楽会」で、オーケストラが奏でるさまざまなジャンルの音楽を楽しんでください。オーケストラはさまざまな楽器があり、一人ひとりが実力を発揮してコラボレーションしていくという、まさに社会の縮図です。企業もそうありたいと、私は常日頃から思っています。出光興産でも多様性を重んじながら、従業員一人ひとりが力を発揮しています。その和の力が、まさにオーケストラだと思います。「題名のない音楽会」で、ぜひその演奏を楽しんでいただきたいと思います。

HIGHLIGHT TOPICS

出光グループの最新情報をお伝えします

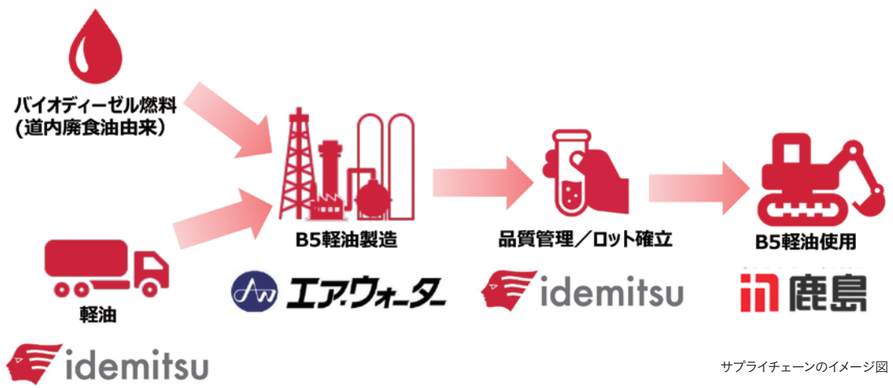
富士石油と資本業務提携し、シナジーを生み出すプロジェクトを発足

当社と富士石油株式会社は、燃料油事業における協業深化と、将来の脱炭素化に向けた取り組みを推進していくことを目的として、4月、資本業務提携をすることで合意しました。
合意を受け、6月には両社の社長や関係役員・役職者が集い、両社が一体となり、スピード感を持ち、提携を推進する目的で設立したプロジェクトのキックオフ会を開催。Fuji and Idemitsu X（クロス） synergiesの頭文字を取って、「プロジェクトFIX」と命名されました。両社の経営資源を集中し、従来の提携からさらに踏み込み、未知数のシナジーを生み出していこうという想いで走り始めています。

がっちりと握手を交わす当社・木藤社長（左）と富士石油・山本社長（右）

北海道で低炭素エネルギーの地産地消と普及を推進

当社は、鹿島建設株式会社が北海道内の工事現場で使用する建設機械および発電機向け燃料として、バイオディーゼル燃料を混合した軽油（B5軽油）の供給を開始します。B5軽油は北海道で回収した使用済み食用油を用いて製造されており、厳格な商品規格をクリアした「出光バイオディーゼル5」として供給されます。



サプライチェーンのイメージ図

第二期は4社でクロスメンタリングを始動！

2023年度に当社と東京海上日動火災保険株式会社の2社で女性活躍推進の施策のひとつとして実施した「クロスメンタリング」を、今年度は帝人株式会社と株式会社リコーを加えた4社で5月24日にスタートしました。
「クロスメンタリング」とは、メンター（支援者、助言者）とメンティ（支援・助言を受ける立場）が他企業同士となる組み合わせで行う企業横断型のキャリア形成支援の取り組みです。女性管理職の自律的キャリア形成と、企業を超えて学び育て合うことによるジェンダーギャップ解消の加速を目的に、企業同士が連携し、主体となって取り組む、国内では先行的な事例です。
第二期となる今回は、各社からメンター（役員等）7名・メンティ（女性役職者）7名ずつの計56名が参加し、約6カ月の間に集合研修や個別メンタリングなどを行っていきます。

参加者の皆さん

e-メタノールの供給網構築に向け、HIF Global社へ出資

南米・北米・豪州などで合成燃料（e-fuel）・合成メタノール（e-メタノール）のプロジェクト開発を行うHIF Global社（HIF社）へ114百万米ドルを出資しました。なお、日本企業によるHIF社への出資は初となります。
HIF社は、将来的にe-メタノール換算で約400万トンの生産規模を見込んでいます。
当社は、2023年にHIF社と合成燃料分野における戦略的パートナーシップに関するMOUを締結し、その後もe-メタノールに関する共同検討を開始するなど、e-メタノールおよび合成燃料の早期社会実装に向けた検討を進めてきました。

出資セレモニーでの当社副社長(当時)の丹生谷(中央左)とHIF社のノートン社長(中央)

当社の最新ニュースは、コーポレートサイトよりご確認ください。

上記より
コーポレートサイトに
アクセスできます。

有機ELフルカラーディスプレイ実用化への貢献で紫綬褒章を受章

当社電子材料部の舟橋 正和が、令和6年春の褒章「紫綬褒章」を受章しました。
紫綬褒章は、科学技術分野における発明・発見や、学術およびスポーツ・芸術文化分野における優れた業績を挙げた個人に授与されます。

受章した舟橋のコメント

近年、拡大している有機ELディスプレイ市場の発展に、本発明により貢献することができ、大変光栄です。栄誉ある紫綬褒章を受章した本発明は、受章者である私以外にも、当社の有機EL材料研究の先駆者である細川地潮（故人）、松浦正英、福岡賢一をはじめ多くの当社社員が関わっており、技術開発の総力を評価いただいたものと考えています。今後も材料メーカーとして、現状の課題に挑戦し続け、有機 ELディスプレイをさらに世界に広げることに貢献すべく、有用な材料開発を進めていきます。

今回の受章は、高効率かつ長寿命の青色発光技術の発明により、有機EL発光において実用レベルでの三原色発光が可能となり、近年の有機ELフルカラーディスプレイを搭載した高機能機器の実用化に大きく貢献したことが評価されました。

個人株主様向けに「愛知事業所見学会」を開催

より多くの株主様に当社株式を保有していただきたいとの考えから、株主還元の充実、株主分割の実施に加えて、株主様向けのさまざまな新施策を展開しています。そのひとつとして、2023年に個人株主様への情報発信のプラットフォームとなる株主専用サイト「いでみつコネクト」を立ち上げ、社長のライブ説明会や社員インタビュー記事など、サイト限定のコンテンツをお届けしています。
また、当社の関連施設の見学会や抽選優待なども開始。最初の事業所見学会として、「愛知事業所見学会」を5月24日に開催しました。

「いでみつコネクト」は
こちらから

司会は、ミュージカルなど多方面で活躍している石丸幹二さん

題名のない音楽会
60th anniversary

当社一社提供のテレビ番組
「題名のない音楽会」が60周年

当社が一社提供で支え続けているテレビ番組「題名のない音楽会」が、
2024年8月に60周年を迎えました。
「題名のない音楽会」は、「良質な音楽をお茶の間に届ける」をコンセプトに、
番組を通じて音楽と視聴者との距離を縮め、
日本の音楽文化の向上に貢献することを目的に放送してきました。
2017年には、「世界一長寿のクラシック音楽番組」として
ギネス世界記録™にも登録されています。
そんな番組と当社の想いを、本誌10ページから特集していますので、
ぜひお読みください。

テレビ朝日
土曜あさ10時放送
※地域によって放送時間が異なります

番組公式サイトは
こちらから

idemitsu

VEGETABLE OIL INK

広報誌 Idemitsu 第9号
発行：出光興産株式会社
制作：日本ビジネスアート株式会社

本誌掲載の写真、イラスト、記事の無断転載を禁じます。